

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

令和4年5月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第984号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

MAY 2022 NO.984

5



わたしも赤十字

寄付の協力者

もりやす 森安ひばりさん(岐阜県高山市／9歳／小学4年生)【P.4でご紹介】

第1特集 5月は赤十字運動月間

だから私たちは、「赤十字会員」になった。

第2特集 ウクライナ人道危機

赤十字に、できること

赤十字の最新情報をSNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

5月は赤十字運動月間 だから私たちは、 「赤十字会員」 になった。



絵本「しんちゃんのランドセル」の読み聞かせをする伊勢さん

日赤新潟県支部 評議員
新潟県支部所属 赤十字ボランティア
フリーランサー

伊勢 みづほ さん 44歳

災害救護の最前線での活動に感謝 専門家として、後押しをしたい

以前、住んでいた静岡県で土石流災害が発生したとき(令和3年 熱海市)、私は迷わず日赤静岡県支部に寄付をしました。被害者に届く義援金ではなく、日赤支部の活動資金として。自分が寄付をしなくても義援金は集まるが、赤十字の現地での活動に目を向ける人は少ないと予想したのです。災害に関する法制度を研究する中で、過去の災害の資料にあたると、「日本赤十字社」の名称を見ないことはありません。しかし、日赤の活動は一般の方にあまり知られていない。日赤が集める義援金にしても、日赤が手数料を取っていないことや、お金の配分はその地域の「配分委員会」が実行するため時間が掛かることを私は知っていますが、教える学生にも誤解している者が多いです。

防災関係の著作が複数あるので、講演を依頼されることがあります。そういう機会を得る中で講演に参加した方々と交流して感じるのは、当事者意識を持って災害に備えること、本当の意味で命を守る行動をとることの難しさ。日赤も、防災セミナーなどの啓発事業を進める中で、同じ課題を抱えていると思います。日赤の災害救護活動を陰ながら支えつつ、社会の防災・減災の課題に向き合っていく仲間としても、支援をしていきたいですね。

日本赤十字社の活動は、個人会員18.2万人・法人会員8.3万法人のみなさまのご寄付によって支えられています。今回はその中から、赤十字の活動に積極的に参加されている方の声を紹介します。

誰かが手を差しのべてくれる 温かい社会を赤十字さんと作りたい

日赤新潟県支部と関係が深かったのは、東日本大震災のあと、「しんちゃんのランドセル」という被災の様子を伝える絵本の制作に携わったことがきっかけでした。震災は私がBSN新潟放送アナウンサーからフリーに転身して1年後に起こりました。地震直後から、宮城県仙台市にある私の実家周辺の様子や被災地での炊き出しの活動をブログで発信していたので、新潟県支部さんの目にとまったようです。この絵本に登場するしんちゃんとその家族、幼稚園を支部さんにつなぎ、絵本をもとにした動画ではナレーターを務めました。こうしたボランティア活動を通して、赤十字社職員の強く、あたたかく、優しい行動に感動を覚えました。どんな時でも、困っている人たちのことを最優先に、困難に立ち向かう赤十字社職員の姿は私の憧れです。幼少期、私が通っていた小学校には、さまざまな背景の子どもたちがいました。障害のある子、親が亡くなったり離婚したりして寂しい思いを我慢している子、同じ子どもなのに、つらい思いをしている子たちを見て強く感じたことがあります。友達や仲間が幸せでないと、私も幸せじゃなくなる、ということ。自分一人ではなく、皆が幸せであることが大切なんだ。私自身、大きな病気をして、たくさんの方から励まされて支えてもらいました。苦しいとき、困ったときにSOSを発することができる周りの環境も大切です。SOSを出しやすく、すぐに誰かが温かい手を差しのべてくれる、そういう社会を、赤十字さんと作っていけば、という思いで、赤十字さんへの支援を続けています。

伊勢さんがナレーションを務めた「しんちゃんのランドセル」▶ <https://youtu.be/0RP2JlbYRvw>日赤大阪府支部会員(有功会会員)
近畿大学 准教授(法学博士)
むらなか ようすけ
村中 洋介 さん 35歳

「人を救う活動」を、共に続けていきたいから

赤十字救急法など神奈川県支部が開催する講習で、ボランティアとして指導員をしています。救急法の指導のために、海外の赤十字社に行かせてもらったこともあります。目前で誰かが倒れた時、人を救う技術を知っていると知らないとでは大違い。講習に参加すると「自分は人を救える」という自信が持てるようになります。仕事や学校の義務で救急法を学びに来た人が、最初はやる気がなさそうだったのに、帰る際にはやる気に満ちた表情になっている。講習の指導員をしていて、うれしい瞬間ですね。

こういった救急法などの講習は、日本赤十字社の活動資金への寄付で成り立っていることを、初めて講習を受けた時に知りました。赤十字は世間には信頼されている団体だと思います。災害救護活動を行ったボランティア仲間が、赤十字マークを付けて活動していると周りから頼られる、赤十字マークの責任の重さを感じる、と話していましたが、こうした団体が存続するため、そして救急法などの講習を継続するためには、寄付が必要。これからも赤十字に人を救う活動を続けてほしい、そして私もその活動に参加し続けたい。これが寄付を続ける理由です。

2014年、ミャンマー赤十字社で
救急法を指導する吉原さん
日赤神奈川県支部会員
神奈川県支部所属 安全赤十字奉仕団
救急法・児童安全法・健康生活支援講習の指導員(ボランティア)よしはら くみこ
吉原 久美子 さん 44歳

赤十字の活動を通して、心の「手当て」を広めよう

災害時に「救い」「護る」活動に従事するから「救護ボランティア」。私は、日赤東京都支部に所属する救護ボランティアです。災害時の衣食住の部分…テント設営から始まり、炊き出しや、避難所で衛生的に暮らすための運営支援を行います。他にも、赤十字救急法や防災の講習でもボランティアの指導員をしています。

かつては献血でも協力していました。実は2015年にがんを告知され、まだ治療が続いているので今は献血ができません。将来、薬も服用しなくなれば献血もできるようになるので、そのときを楽しみに待っています。

がんの手術や闘病で、支えてもらう有り難さが身にしました。自分よりも体の小さい看護師さんが動けない自分を支えてくれたり、たいへんお世話をなったなあ、と。自分が受けた恩を、誰かに返したいという気持ちがあります。赤十字の活動に参加するのは、支え合うことに関われるからです。赤十字で学んだスキルがあるから「どうしましたか」と声を掛けられる。けがをしたら手を当てることを「手当て」と言いますが、声を掛けることは心の手当てになります。

人は一人では生きていけないです。ボランティアや指導員として貢献させてくれてありがとうございます。赤十字さん、これからもよろしく、という気持ちで会員をさせていただいている。

日赤東京都支部会員
東京都支部所属 救護ボランティア
防災教育事業指導者・救急法指導員(ボランティア)かわかつ まさひろ
川勝 正洋 さん 56歳

誰かのために何かしたい、その気持ちを託せるのが、赤十字

語学奉仕団の活動に携わって19年になります。高校の英語講師をしていた経験を生かしてボランティア活動をしたいとネットで検索し、日赤本社に所属する語学奉仕団(語奉)の存在を知りました。語奉の活動にはさまざまなものがありますが、私は日本語の絵本を英語に翻訳したり、病院で患者さんの通訳をする「医療通訳」に携わっています。赤十字の奉仕団として期待されますから、即戦力であり続けるために勉強も怠りません。語

奉のメンバーは、フルタイムで働いているのに、勉強会にも熱心に参加されます。赤十字らしいのは、単にスキルアップの勉強会ではないのです。活動中に感じた疑問や不安、こういう場合はどう振るまえばよかったんだろうという心の在り方・考え方を話し合って、皆で解決していく。団員の中には、青少年赤十字出身で、赤十字経験の長い方もいます。赤十字の奉仕団活動を続けていて感動するのが、出会う人、出会う人が素晴らしい、ということ。そのおかげで、「赤十字だから安心」という意識が芽生えました。今では、誰かのために何かしたいと思ったとき、夫と一緒に赤十字へ寄付をしています。



医療通訳の勉強会に参加する柴田さん(左端/※コロナ禍前の様子)

日赤千葉県支部会員
日赤本社所属
赤十字語学奉仕団(ボランティア)しばた ひさ さん 76歳
正雄 さん 80歳

赤十字の会員とは

会員とは日本赤十字社の目的に賛同し、支援してくださる方のことです。会員には、会費として年額2000円以上のご協力をいただくことにより個人・法人を問わず、どなたでも加入することができます。日本赤十字社の活動は、支援してくださる会員によって支えられているため、一人でも多くの方に会員になっていただけるようにお願いしています。

会員になる方法について詳しくはこちる⇒

<https://www.jrc.or.jp/about/staff/>

TOPICS

5月は赤十字運動月間「救うを託されている。」 新CMで描く“一歩、踏み出す力”

赤十字運動月間のテレビCM「勇気のリレー」篇 被災地で何もできずに立ちつくすだけの青年が、行動する先輩の姿に勇気をもらい一步踏み出していくというストーリー



5月1日は日本赤十字社の前身「博愛社」の創設日、5月8日は「世界赤十字デー」です。日本赤十字社は、赤十字にゆかりある5月を「赤十字運動月間」として、毎年、赤十字への理解を深め、赤十字の活動への参加を呼び掛ける取り組みを行っています。

今年度、赤十字運動月間のテレビCMでは、抗えない出来事に打ちのめされながらも、弱さを振り払って立ち上がる青年の姿を描いています。

「危機を前に、人は弱い。」——災害が起きたとき、「自分には何もできない」と無力感を感じることがあるかもしれません。しかし、まわりの人々と力を合わせれば、困っている人・苦しんでいる人のために、できることがあります。——「でも、危機を前に、人は強い。」

救護団体である日本赤十字社は、「危機」発生時の救護活動はもとより、災害から命を守るための取り組み(防災・減災)や、災害後の復興支援など、あらゆるフェーズで「救う」活動を続けています。一人でも多くの方のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

赤十字のさまざまな取り組みや
寄付支援のはじめ方などを
詳しく紹介しています。

運動月間特設サイトはこち
ら▶
運動月間CMもご覧いただけます



<https://www.jrc.or.jp/lp/gekkan/>

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

一人で始めた弾き語りの募金活動。今年の春は仲間も増え、盛り上がりました！



寄付の協力者

もりやす

森安ひばりさん

岐阜県高山市／9歳／小学4年生

去年の夏休み、宿題の自由研究のテーマをお母さんと相談して、習っているギターで何かしてみたら?と言われたんです。ちょうど熱海の土石流災害をニュースで見た後でした。そうだ、熱海で困っている人のためにお金を集めよう!と思いつき、すぐにギターをつかんで家を飛び出し、駅前で「カントリーロード」を演奏しました。好きなアーティストがギターを弾いて歌う姿に憧れ、親にお願いして音楽教室に通いはじめて、4ヶ月。募金活動のために駅前やスーパーの前で歌わせてもらいましたが、見向きもしないで素通りしていく人もけっこういて、落ち込むことも。でも、中には、「頑張って」とジュースをくれた人や、なんと熱海から応援に来てくれた人たちがいて、うれしくて。今年の7月、熱海の災害が起きた日に、その人たちに会いに熱海に行く予定です。

ウクライナで戦争が起こって、爆弾を落とされたり多くの人が亡くなったり、というニュースを知ったときはショックでした。今度はウクライナ

の人のために何かしたいと思い、スーパーの前で募金活動を始めたところ、同じ音楽教室の仲間も参加してくれて、多いときはメンバーが7人に。「日曜日よりの使者」をみんなで演奏すると、楽しくて、一人でやっていたときと違って疲れない!仲間とやると演奏も盛り上がり、人もどんどん集まってくれます。熱海の募金活動も、ウクライナの募金活動も、みんな幸せでいてほしい、ただそう願ってやったこと。赤十字に預けたお金が、大変な目に遭っている人たちが幸せになるために使ってもらえることを願っています!

寄付するあなたも赤十字です

- クレジットカードで寄付
- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口



TOPICS

100年継承される日赤の助産師教育

1922(大正11)年5月、東京・広尾の地に日本赤十字社本部産院と産婆養成所が開設され、助産師の育成が開始されました。現在は日赤医療センター(東京・広尾)の付帯事業として運営され、今年の100周年を迎えるまでに3000人を超える助産師がここから巣立っています。

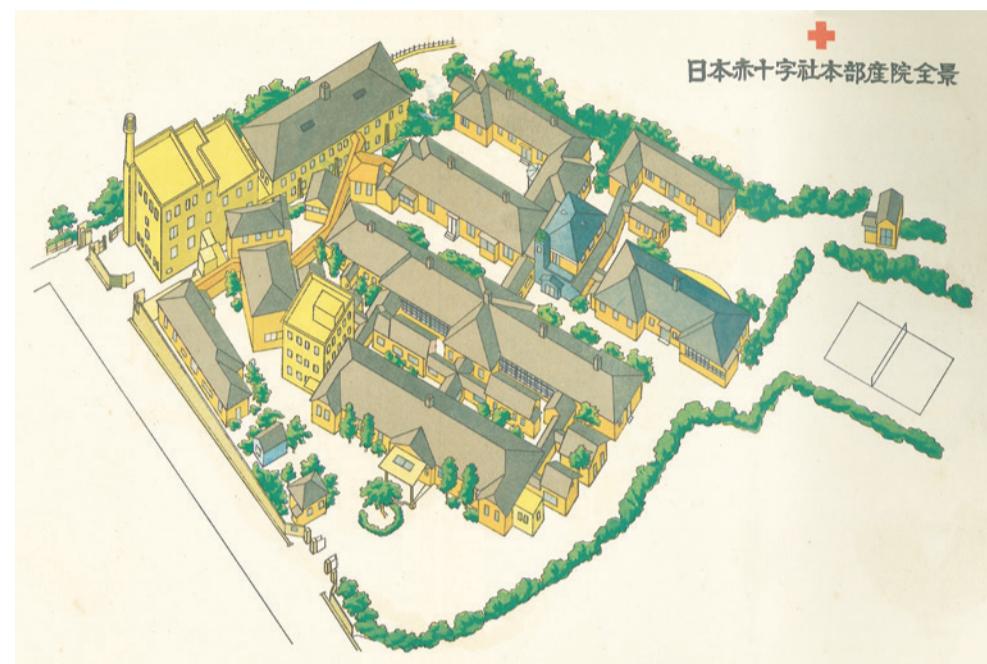
現在の日本赤十字社助産師学校は、母体救命対応総合周産期母子医療センターとして年間約3000件以上の分娩に対応する日赤医療センターを実習の場としており、実践的な学びを得られる環境が整っています。また、学生は日赤の乳児院のほか、保健所、助産所でも実習を行い、応用力も備えた助産師として、卒業後はさまざまな分野で活躍しています。

日赤が産院と産婆養成所の2施設の開設に至った背景には、その3年前に赤十字社連盟(現在の国際赤十字・赤新月社連盟: IFRC)が創設されたことが関係しています。日赤は、平時の保健事業を推進する赤十字社の連盟の一員となり、日本の乳幼児死亡率(平均14%*)が欧米に比べて著しく高いことを改善すべく、妊産婦・乳幼児保健診療機関としてこの2施設を開設しました。

産院の開院当初は、自宅分娩が主流だった時代でした。当時の記録には、産院の趣旨を周知し、妊産婦を呼び込むための苦労と努力の様子が残されています。母体と乳児を守るために始めた事業ですが、助産師たちの呼び掛けに対し、妊婦から「産院なんて立派なところには行きづらい…」と渋されることも。状況が一変したのは、1923(大正12)年、開設の翌年に発生した関東大震災でした。大火災となった東京で、産院は大きな被害を免れました。助産師らは自らが被災しながらも約2000人の妊産婦と乳幼児の救護に貢献。それ以降、震災から復興に向かう中でも日赤産院での出産数は急増したのです。

月日がたち、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震でも、赤十字の教育を受けた助産師たちが被災地で活動しました。助産師たちの赤十字の理念に基づいた非常事態での対応力は、時代を超えて受け継がれています。

*昭和6年発行「日本赤十字社産院史」より



「日本赤十字社本部 産院」開院当時の門



関東大震災では、敷地内にパラックを建て、罹災妊産婦を収容

献血 まるわかり 辞典

「なるほど！」と思わずひざを打つ
“献血にまつわる豆知識”を紹介する
コーナー。第2回のテーマは、血液
確保の要となる「献血ルーム」です！

vol.2



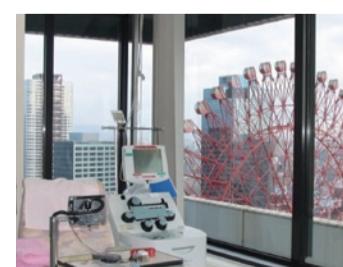
けんけつ - る - む 【献血ルーム】

イメージ激変！ 今や癒やし空間に
献血ルームのビフォーアフター

今や全国に136カ所ある献血ルームですが、皆さんはどの献血ルームがお気に入りですか？

献血ルーム第1号は、1978年、雨風や採血車の駐車場所に悩まされることのない採血場を確保しようと、横浜駅西口の地下街の一角に誕生しました。当時は、血液をガラス瓶にためていたため、衛生面の観点から献血者と採血担当者の間に隔壁を設け、穴から腕を差し出すスタイルでした。

献血ルームでは開設当初から、空腹での献血で体調を崩さないよう、飲み物やビスケットなどを提供していました。少し堅いイメージが激変した理由は、例えばカフェのような空間や地域の特色に応じた空間をイメージし、少しでもリラックスできる空間を目指したことあります。楽しんでもらえるような景観、Wi-Fiを完備するなど、快



上) 東京スカイツリータウンに隣接する東京ソラマチの10階にある献血ルーム「feel」。東京の絶景を眼下に望む、癒やし空間

下) 大阪駅から歩いてすぐの場所にある「阪急グランデビル 25献血ルーム」は、なんと目前に大観覧車が

適性を追求し、献血ルームはかつての「近寄りがたいイメージ」を払拭した癒やしの空間へと変化を遂げました。

突如として、激しい紛争に巻き込まれた人々のために…

ウクライナ人道危機 赤十字にできること

難航するマリウポリ市民の救出

4月1日以来、赤十字国際委員会(ICRC)はマリウポリの市民を救出するため、昼夜を問わず市内に入ろうと試みています。これまで近づけたのは、マリウポリまであと20キロの地点。ようやく交渉が成立した4月5日、ICRCはマリウポリに隣接する都市ベルジャニシクから、1000人以上の避難者が乗るバスと自家用車の車列を、約200キロ離れたザボリージヤまで先導しました。このときの避難希望者のほとんどが、自力でマリウポリから脱出してきた市民です。できるだけ多くの避難者をバスに乗せるため、バスの通路に夜通し立ったままの人もいました。

バスに乗った避難者の多くは女性、子ども、高齢者です。ペットを連れた方も多く、犬や猫、小鳥、カタツムリを連れている人も。その中に、家族をマリウポリに残し独りぼっちで乗車した14歳の少女の姿がありました。彼女は周囲の大人たちの配慮で、いち早くICRCのもとへ連れて来られました。

ICRCチームには、地雷や不発弾など放置された武器を扱う専門家や医師も含まれています。車列は、武器が残留した危険地域を通るため、トイレ休憩の際には舗装されている場所だけ歩くように注意を喚起しました。ICRCは、マリウポリの人々を安全に避難させるため、そしてマリウポリ市内に人道支援を届けるため、紛争当事者と交渉を続けています。なかなかセキュリティ上の条件が満たされず、目と鼻の先の場所で足止めされたままでですが、いつでもマリウポリに入るよう、態勢を整えています。

(4月20日時点)



©ICRC

避難者を乗せたバスと自家用車をザボリージヤに先導するICRC車両



©ICRC

イルビンで負傷した人々に応急手当を施すICRCスタッフ



©Maksym Trebukhov/ウクライナ赤十字社 Maksym Trebukhov/Ukrainian Red Cross
防空壕(こう)や地下鉄の駅に隠れている数千人の人々のために食料と生活必需品を準備するウクライナ赤十字社。赤十字ボランティアも活躍

世界に広がる支援の思い… 国際赤十字が一丸となって挑む



主に紛争地で活動 災害対応、各国赤十字・赤新月社の支援 192カ国での国と地域で活動

ティン・シェップは次のように語ります。
「ICRCのスタッフは、首都キエフ(キエフ)をはじめ、南部オデーザ(オデッサ)、東部マリウポリ、ドネツク、ルハンスク、その他多くの場所に、医療品や食料、水、衛生用品を届けています。しかし、急増するニーズに対応するためには、さらに多くのことをしなければならないのは明らかです。そのため、私たちはウクライナや近隣諸国に追加のスタッフや物資を送り込み、今回の紛争で苦しんでいる人々を支援しています」

「苦しんでいる人を救いたい」という同じ志で、それぞれの使命にまい進していた3つの赤十字機関が一丸となり、人道支援の輪を拡大させています。

ICRCは2014年以来、8年にわたり続くウクライナ紛争で犠牲となっている人々を支援してきました。

ICRCの欧州・中央アジア事業局長のマー

クは、「ウクライナ人道危機救援金」が活用されています。

赤十字の国際的連帯

今できることを。 日赤職員の支援報告

ウクライナの西側に国境を接するモルドバ共和国。欧州の中でも特に経済的に不安定な国といわれる同国には、全人口の10%を超える数のウクライナ避難民が流入しました。モルドバ赤十字社を支援するため、IFRCの要請で派遣されたのが、大阪赤十字病院の河合謙佑さんです。河合さんはネパール地震やパングラデシュ南部避難民支援など、数多くの救援活動に参加。今回のウクライナ人道危機での任務を次のように語ります。

「私は現在、モルドバで世界各地から輸送されてくる救援物資や資機材の搬入、倉庫での適切な保管管理、人々のニーズに応じた救援物資の的確な輸送手配・搬出を担当しています。現在、モルドバ赤十字社と協力し、モルドバに赤十字の救援物資の拠点を作るべく、それに適した倉庫の準備をしています。先日郊外の街へ支援物資の配布に行きました。支援を求める人々に物資が手渡されている場面を見ると、自分に任されている業務の重要性を再認識します」

IFRCからの要請でモルドバに着任したメンバーは河合さん含め7人。カナダ、スペイン、タジキスタンなど、7人全員の国籍と母国語が違いますが、英語でコミュニケーションを取り、赤十字チームとして連帯を強めています。

一方、同じくウクライナの隣国・ハンガリーには今回のウクライナ人道危機に対応するための本部が設置されているIFRC欧州地域事務所があり、3月中旬、日赤本社の方原みなみさんが同国に着任。ウクライナおよび周辺7カ国でのニーズや赤十字の活動について情報収集を行うとともに、国際赤十字と連携し、日赤からの資金・物資・人的支援を投入するための協議・調整・手配を行っています。

ハンガリー国内には、これまで43万人以上がウクライナから避難してきました(4月12日時点)。ハンガリー赤十字社は、国境近くの3カ所でヘルスケアセンターを運営、そこには医療職のボランティアが忙しい仕事の合間にねってシフトを組み、避難者の健康を守る活動に参加しています。

国際赤十字の調査チームとして同センターを訪れた芳原さんは、「避難者のために全力で取り組んでいる地元の医療ボランティアを、外国人である私たちが少しでも助けられる方法がないか、話し合っています」と語ります。このような状況を受け、国際赤十字はハンガリー赤十字社が実施するウクライナからの避難者に対する医療支援のサポートとして、各国赤十字社の医師・看護師を派遣することを決定しました。世界的赤十字が協力し合い、ウクライナ避難民を支える活動は続いていきます。



©Victor Lacken/IFRC
河合さんの任務は救援物資倉庫の管理業務。適切なタイミングでニーズに合った物資が届けるために、国際赤十字で必要不可欠な任務



ヘルスケアセンターでハンガリー赤十字社のボランティアと協議する芳原さん(左端)



ウクライナから避難してきた人に保健医療を提供するハンガリー赤十字社の医療ボランティア



©モルドバ赤十字社
温かい飲み物と食べ物でウクライナ避難民を迎えるモルドバ赤十字社職員とボランティア

ICRC駐日代表部 インタビュー

紛争下での「赤十字マーク」 その大切な意味

赤十字国際委員会 (ICRC) 駐日代表部 広報統括官 真壁仁美さん

ICRCはウクライナで、ロシアとの国境沿いのスムイ(スミ)から数千人、東部沿岸部ベルジャニシクからマリウポリ市民を含む千人以上を避難誘導しました。これが実現したのは、赤十字が紛争当事者と直接交渉ができる組織だからです。

赤十字マークは、「攻撃してはならない」という意味を持ちます。国際法で

厳格に定められているため、私たちは一切武装をせず、このマークを命綱に紛争の犠牲となっている人々に寄り添うことができるのです。一般の方が、赤十字マークをむやみに使用してはならない理由もここにあります。

また、紛争当事者は赤十字マークを尊重し、政治とは離れたところで、中立で独立した人道支援ができるように便宜を図らなければなりません。ロシアもウクライナも、戦争のルールであるジュネーヴ諸条約に加入しています。

その一方で、赤十字マークを付けていようがいまいが、私たち職員は安全が確保できない場所には入れません。もしも被害に遭うようなことがあれば、現場での活動が中断されます。さらに被害者を増やすことで、現場のお荷物になってしまいます。そのため、すべての紛争当事者と対話をしながら、現場のセキュリティー状況を分析して活動します。

赤十字の中立な姿勢は時に誤解を呼ぶこともあります。敵味方の区別なく、赤十字の到着を心待ちにする人たちの所にたどり着くために、とても重要なスタンスなのです。

ウクライナ人道危機 赤十字の人道支援の活動マップ

昼夜を問わずにウクライナおよび周辺国で展開されている赤十字の人道支援活動。目まぐるしく変わる情勢に赤十字も全力を挙げて対応しています。令和4年4月1日時点の赤十字の活動をマッピングしました。日本赤十字社も赤十字のネットワークを活用して、必要な救援活動が実施できるよう、常に準備しています。



From Ukraine

爆撃音の中で、
95歳の誕生日を祝う

ウクライナのヘルソン地方で爆撃の音が聞こえる中、ハリーナさんは95歳の誕生日を迎えました。ウクライナ赤十字社のボランティアがハリーナさんの元を訪ね、不安と緊張の中、誕生日を一緒に祝うことができました。



IFRCが各国赤十字を通じて 支援を届けた人数

約100万人
約11.4万人
約9.1万人
9.6万人
2.8万人
4.2万人

(※国際赤十字・赤新月社連盟の4月19日付報告書より)

ウクライナ人道危機、長期化を見据え

避難民の希望をつなぐ 心の支援を

Special Message

森光玲雄 (もりみつ・れお)

謹訪赤十字病院 臨床心理士・公認心理師
国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)心理社会的支援センター登録専門家。
2014年のウクライナ紛争後、IFRCの避難民支援事業でウクライナに複数回派遣され、現地調査および助言提供を担当



スロバキアの「チャイルド・フレンドリー・スペース」で遊ぶウクライナ避難民の子どもたちと赤十字ボランティア

2022年2月からの紛争激化に伴いウクライナ国内外で多くの避難民が生まれています。ウクライナでは8年前の2014年から東部の一部地域で紛争が続いているおり、これまでに150万人以上の市民が避難生活を余儀なくされてきました。ここでは、東部からの紛争避難民に対する支援事業に関わった経験から、当時の様子を振り返りつつ今後の支援に必要と思われることについて考えてみたいと思います。

避難生活の初期はとても過酷です。日常を突然失い生活環境の変化もめまぐらしく、何らかのストレス反応が表れるのも珍しくありません。特に紛争避難民では爆撃などの生命の危険にさらされたり、町の破壊を目撃したりにしたりと衝撃的体験をしている方も多く、私が出会ったウクライナの国内避難民



ハンガリー赤十字社の支援センターでは、ウクライナの紛争から逃れた人々に宿泊施設、食事、医療サービス、社会活動を提供しています

の方々も、初期は生き延びるために緊張で張り詰めたり、わずかな物音にも過敏になっている方が多くいらっしゃいました。また、子どもたちにもストレスの影響は表れます。過度に怖がる、無口になる、養育者にしがみついて離れないなど形はさまざまですが、多くの母親が「子どもが別人のようになってしまった」と心配を募らせていきました。

こうした初期のストレスを和らげていくためにまず必要なことは、脅威と離れ安心して過ごせる環境を整えることです。2014年当時、現地ウクライナ赤十字社がまっ先に行なった支援も、ケガの応急処置、物資や地域で使える食料クーポンの配布、住宅に関する情報提供など、生きていくことを現実的に支える取り組みでした。これらの生活支援に加えて、特に子どもには安心できる人たちと過ごし、遊びに没頭したり、体を動かしたりできる時間が欠かせません。赤十字は子どもたちがいつでも立ち寄れる拠点として「チャイルド・フレンドリー・スペース」をウクライナ各地で運営していましたが、今回の避難民対応で周辺国でもこうした活動が拡がっています(上部写真参照)。子どもが子どもらしく笑顔で過ごせる姿を支えることは、母親の不安を軽減し、避難生活における希望をつなぐ効果もあります。

ただ、避難生活は長期にわたる場合が多く、転居を繰り返すうちに徐々にストレスが積み重なってきます。新しい土地で人間関係を

一から築いていくことは大きなストレスとなります。こうした状況を予防するため、サロン活動などの関係づくりを支援する取り組みを赤十字は行ってきました。ある高齢の避難民は「都会生活になじめず寂しさがあったけれど、赤十字のアクティビティーを通して絵を描く仲間ができた」と語ってくれました。また、慣れない土地で「自分の存在が無力に思えた」とおっしゃる方は少なくありません。ただ、新たな仕事を見つけたり、自らボランティアとして仲間を支える活動にやりがいを見出したりしながら時間をかけて意欲を回復させていく避難民の姿もたくさん目にしています。

このように、中長期的には、移住先での社会的つながりや役割の再獲得を支えるという視点も大切になっていきます。生活環境が安定し、新たな土地で安心できる居場所や関係性ができるはじめると、ここでやっていけるかも、という希望も宿りやすくなります。また、社会活動などを通して自分にもできることがあると実感していく過程が、自分という存在への信頼を取り戻し前向きに生きる力にもつながっていきます。避難者の当事者体験はしばしば長い旅路に例えられます。ウクライナの避難民支援は長期にわたることが予測され、その長い旅路の中でさまざまな支援者が避難者の立場に立って希望をつなぎ続けていくことが大切と考えています。

赤十字、 世界の「現場」から

supported by IFRC



国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、赤十字国際委員会(ICRC)、日本赤十字社が実施する世界の赤十字活動。

ベトナムの河口汽水域(淡水と海水がまじわる場所)でマンゴロープの植林活動を行う、赤十字の小舟。せっかく植えても、流される苗も多い。メンテナンスを繰り返し、定着させ、大きな森に育っていく。環境汚染に加え、エビなどの養殖池の造成に伴う伐採により、激減したマンゴロープを復活させるために。

マンゴロープは、高潮や津波を抑制するので住民の命を守り、魚やエビが自然に繁殖するため生活の糧にもなる。日本赤十字社・IFRCの協働で、1997年から2017年まで植林・災害対策事業が実施され、マンゴロープは1万408ヘクタール(東京ドーム2226個分)に拡大した。

マンゴロープは、高潮や津波を抑制するので住民の命を守り、魚やエビが自然に繁殖するため生活の糧にもなる。日本赤十字社・IFRCの協働で、1997年から2017年まで植林・災害対策事業が実施され、マンゴロープは1万408ヘクタール(東京ドーム2226個分)に拡大した。

危機を前に、人は弱い。 でも、 危機を前に、人は強い。

災害や感染症の脅威が訪れた時。

人は不安になる。恐怖に怯える。

けれど、人は励まし合い、前に進むことができる。

私たちは知っています。

大切な人を守ろうとする姿を。

災害に立ち向かおうとする人たちの強さを。

そんな思いに応えて、ともに乗り越えていくために。

災害の現場で、赤十字の医師・看護師・ボランティアが活動をつづけます。

—— 救うを託されている。あなたとともに。



救うを託されている。→ +

活動資金へのご協力を、よろしくお願ひいたします。

赤十字運動月間 5.1(Sun) ~ 31(Tue)

寄付するあなたも赤十字です

[赤十字 寄付](#)



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society